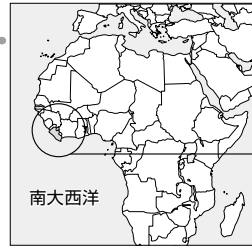


ユニセフ 子ども物語

地球に生きる子どものくらし

Republic of Liberia

リベリア共和国



地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。



「もう一度、チャンスを！」 ～ルースちゃんのお話～

リベリアの首都・モンロビアから車で1時間ほどのところに、ルースちゃんが暮らす町、キャリスバーグがあります。リベリアは1989年から2003年まで、14年間にわたる内戦を経験し、49万人が家を追われました。ルースちゃんもまた、内戦で家を追われて、国内を転々と生活していく中で、家族とも離れ離れになったひとりです。やがて、面倒を見てくれていた夫婦ともはぐれてしまい、友達の家を泊まり歩いたり、路上で生活するようになりました。あてもなく生活している中、ある男の子と出会い、付き合うようになりました。そして、14歳で出産。子どもの父親とは、妊娠が分かってから、連絡も取れていません。



リベリアでは、18歳までに妊娠した20代前半の女の子の割合は38%と、世界でも8番目に高い数値となっています。また、10代で妊娠した女の子たちは家族から見放され、学校へも戻れずに社会的・経済的に疎外されてしまうケースが非常に多く報告されています。ルースちゃんもまた、頼れる大人がいない中、途方にくれていました。そんなルースちゃんを支えてくれたのが、ユニセフが支援しているウーマン・オブ・フェイスという団体でした。ウーマン・オブ・フェイスは2010年に立ち上げられ、10代で妊娠・出産し、学校へ戻れない母親たちに、もう一度教育を受けるチャンスを与えたり、教育や職業訓練を通じて女性が社

会的・経済的に自立できるよう活動しています。若くして母親となった女の子たちが学校に行っている間は、ウーマン・オブ・フェイスの女性たちが協力して赤ちゃんの面倒を見ます。女の子たちは、学校から帰ったら、石鹸作り、料理、もしくは裁縫のクラスに通い、自分で将来の生計がたてられるように訓練を受けます。



ルースちゃんも、ここで生活しながら学校に通い、裁縫のクラスを受講しています。ルースちゃんは、私たちにこう話してくれました。「今、とても幸せです。学校に戻れて、守ってくれる、自分のことを大切に思ってくれる大人に出会えて幸せだと思います。かつては一人きりで家族もおらず、生きていくのも辛かったのですが、今は、怖いものなどありません。」



物語の国 リベリア共和国

西アフリカに位置するリベリアは日本の3分の1ほどの面積に、420万人が暮らす、大西洋に面した国です。また、シエラレオネ、ギニア、コートジボワールと国境を接しています。18歳未満の子どもが全人口の49%を占めており、主な産業は鉱業・天然ゴムなどです。1847年に独立し、アフリカではエチオピアに次いで2番目に歴史の古い国です。



© 日本ユニセフ協会
リベリアの子どもたち

すべての子どもの権利が守られる社会づくりのために

リベリアの子どもの状況

(より詳しい統計は「世界子供白書2014」をご覧ください)

項目	統計	
	リベリア	日本
5歳未満児死亡率(2012年) ※1000人あたり	75	3
乳児(1歳未満)死亡率(2012年) ※1000人あたり	56	3
出生時の平均余命(2012年)	60	83
国際貧困ライン1日1.25米ドル未満で暮らす人の比率(%) (2007-2011年)	84	-
子どもに対する暴力的なしつけ(%) 2005-2012*	94	-
15-19歳の女子1,000人あたりの出産数 2008-2011*	177‡	5
女子が初等教育の最終学年まで残る率(対男性比、%) 2008-2011*	85	100

出典:『世界子供白書2014』

* データが表記の期間内に入手できた直近のものであることを示す。

‡ データが各列の見出しで指定されている年次もしくは期間以外のもの

リベリアの課題

1989年から14年続いた内戦の終結から10年、リベリアはようやく、復興の兆しを見せつつあります。しかし、高い貧困率や失業率、頻繁におきる停電、未整備の道路や全壊した建物、法整備の遅れなど、内戦は今でも大きく国民の生活に影響を及ぼしています。さらに、リベリアでは、女性や子どもへの暴力が非常に大きな課題となっています。リベリアの女性の3人に1人はレイプをされた経験がある、という報告もあり、モンロビア市内の病院では、2013年1月から9月の間にレイプで搬送されたケースは1300件にものぼります。このうち、90%が18歳未満の子どもたちで、うち10%は、レイプが原因で命を落としています。また、家庭内暴力も横行しており、15~19歳の女の子の39%が家庭内暴力を経験したことがある、と答えています。2007年に行われた調査では、2~12歳の94%が肉体的・精神的な体罰を受けた経験がある、という事実が明らかになりました。このように、リベリアは多くの国民、とりわけ女性が暴力に直面し、時として健康や生存の危険にも晒されていることが非常に大きな課題となっています。



© UNICEF/NYHQ2007-0665/Pirozzi
レイプの防止・警察への通報を呼びかける看板

宗教指導者との連携を通じた子どもの保護

ユニセフ・リベリア事務所では、宗教指導者との連携を通じた子

どもの保護事業に取り組んでいます。ユニセフと世界宗教者平和会議(WCRP)は、2010年よりリベリア国内において、紛争下の子どもの保護事業に取り組んできました。宗教指導者はリベリアの人々の日々の暮らしの中で非常に大きな影響力を有します。ユニセフはWCRPと連携して、宗教指導者へ研修を行い、各宗教に則したメッセージを広めることで、子どもの保護に関するメッセージをより効果的、かつ長期的に伝えていけると考えています。



© 日本ユニセフ協会
月に1度、あらゆる宗派の人々が集い、子どもの保護に関して意見交換を行う。

ラジオを通じたメッセージを広める取り組み

WCRPとユニセフのパートナーシップで取り組んでいるプログラムの中に、ラジオ番組があります。週に1度、地元のラジオ局“SMILE FM”と協力し、毎週木曜日に1時間の放送枠で、子どもの保護に関するテーマを取り上げ、ゲストを呼んでトークショーを行っています。電気の通っていないリベリアではラジオが大きな役割を果たし、15万人がメッセージを受け取ることが期待されています。



© 日本ユニセフ協会
子どもの保護に関するラジオ放送を聴く地元の青年たち

子どもの健やかな成長のために

また、リベリアでは、5歳未満の子どものうちの42%が発育障害であると報告されており、ユニセフは、栄養不良の子どもの治療にも力を入れています。首都から車で10時間、リベリア北東部のズウェドルにあるマルサ記念病院では、栄養不良の子どものための簡易栄養補助食品を用いた治療などが行われています。

すべての子どもが元気に成長できるよう、ユニセフはこれからも見守ってまいります。



© 日本ユニセフ協会
簡易栄養補助食品のひとつ“プランピーナッツ”